

21世紀：若者たちの危機

The Crisis of Youth in the 21st Century

篠田知璋 Tomoaki Sinoda

くらしき作陽大学音楽学部

教育音楽科専任教授(音楽療法専修)

はじめに

私は現在、勤務する大学で、音楽療法士の教育を担当している。私から見ればマゴの年代の若者たちを教育しているのだが、彼らをととても可愛く思い、暖かく育ててゆくことが自然に出来る気がしてとても楽しい日々を送っている。今回筆をとる機会を与えられたので、私が捉えた若者達の実体、若者たちを造り出す私たちが嘗む社会の実情について言及し、その具体的対策について述べてみる。

[今の世の中は]

昨年秋、ニューヨークでは自爆テロによるすさまじい出来事があった。あっという間に巨大ビルが2つ破壊され、数千人もの人々が命を落とした。絶句するほどのショックであった。元はと言えば、2千数百年くり返されている宗教戦争の一連のものと言えよう。信仰、神を敬い、生かされていることへの感謝、そして人命を尊重する心をはぐくむ筈の宗教がなぜ矛盾した行動に人を走らせるのだろうか。他の宗教は認めない、異教徒の命を奪っても構わない信仰があるのだろうか。もっとも、“貧すれば鈍す” 飢餓は人々の理性を奪い、理不尽な行動に走らせる。信仰心は二の次、と言う結果なのかもしれない。

人類の平和、人命の尊重を信条とする米国が彼等の被害をこうむった訳だが、核を保有し、平和を乱す国やテロに武力行使をする世界最強の国である故に、ターゲットにされたのだろうが、この米国にある矛盾が攻撃されたものと思う。この事件に関連して驚かされた事が今一つある。それは事件後に直ちに示された米国人の行動である。すなわち、救援のために皆が駆けつけ手を差し出す。全てボランティア精神で行動し、心を一つにして助け合う。愛国心ゆえの行動なのだと思う。ボランティア精神で行動に移せると言うのは、米人独り独りが自立し、“己れ”を知っているからこそ出来るのだとも思う。この様な敬意を払うべき行動は、果たして日本人に出来るのだろうか、と私は考えてしまう。先の阪神大震災の後に人情が戻ってきたという話を聞くことが出来た事は大変感銘を受けたが、愛国心となると果たしてどうだろう。

わが国は第2次世界大戦に敗戦して以来、60余年にわたって戦争がない平和な国となり、物

質的にも恵まれて安楽に暮らしている。世界人口60億の中で3/4は飢えている現状の中で、私たちは物質的にのみ恵まれているのだから平均寿命も伸び、今や世界1、2、を誇る長寿国にもなっている。この様な恵まれた国に住んでいるのだから感謝をし、恵まれない国の人々に援助の手を差し延べる人が多く存在してもよいと思うが、現実には甚だ少ないのではないだろうか。

わが国は敗戦後、焼け野原となり、復興のために一丸となって懸命に働いた。そして見事に立ち直り、さらに発展して経済大国にのし上がった。そして物質至上主義が隆盛となった。物欲が増すと、人々は心や魂を忘れ去ったかのように行動する。平和の国では、自己中心的な行動をするものたちが増加し、団結や相互扶助、そして感謝の心を耕すより、いたずらに物、金を得ようとする。これがわが国の現状である。もともとわが国の伝統の中になたて社会があり、平和になっても家庭内以外で社会に現存しているために自立性のある人間は育ちにくく、画一的な行動に走る傾向がある。従ってオリジナリティを持つ人間もわずかだし、自分が生まれ育った国のことを考え、愛することなど念頭にない人々が多いのである。この現状だから先述した米人の行動はなかなか取れないのではないかと私は考える。

【文化的低迷】

物質至上主義が勢いを増す中で、物質文明の発達は便利さを増し、人々は各自の頭をそれほど使わずに安易な生活が出来るようになった。読み書きも今はワープロとコンピューターである。今ではホワイトボードに字を書くと、そのまま印刷されて出てくるものまで出現した。この様な便利さは人々の思考経路を短絡化させ、「考える人」を減少させた。その結果、読書よりもマンガの時代となり、今やマンガ世代は50代にも及んでいる。20数年前から経典である般若心経や聖書の類までマンガ化されているようだ。このような事態をどの様に捉えるか。私たちの時代にはこれらの文明機器はなかったので、学生時代、青年時代に苦勞して難解な書物を読み、習字を練習、そして思考能力、創造力を身につけているから、冷静に、客観的に困ったことだと思い、対応策を考える。しかし、今の時代しか知らない若者たちは、この事態が全てなのである。そして今の状態に違和感を抱くことすらなく当たり前と捉えてしまう。故に若者たちは成長してゆく必要性に気づかず、未発達のまま身体だけ大人の型になるのである。

「不幸な若者たち」

私は、3年前定年を迎えるまで貴学に診療所長と一般教育部からコミュニティー福祉学部に教員として15年間奉職していた。同時に学生相談所でも幾多の学生たちのカウンセリングを担当した。その15年間に現代の大学生たちを知ったのだが、彼等の幼さ、思考力の乏しさ、そして“己れ”を知らず周囲に依存的で、振り回されている学生が大半を占めている現実に大変な衝撃を受けたのである。それでも、自分の問題、葛藤を意識して私の所に相談に来た子たちは、向上心も成長意欲もあったので、私は積極的に支援を続け、ある程度の成果をあげるこ

が出来たと思っているが、これらの悩む子たちはレベルが高いといえよう。成果の上がった例と言えば、私と長くふれ合っているうちに、私のような医師になりたいと、卒業後に医学部を受験し合格して晴れて医師になって活躍している男子学生が2人存在することである。私のカウンセリングは、治療とゆうより、彼等の成長を援助することに目的があったのだが、いわば子育ての一端を担っていたともいえよう。そして、定年直後から私は日本で画期的な仕事、つまり音楽療法を専門的に実践する音楽療法士を育てる仕事を、くらしき作陽大学音楽学部で行うようになった。文字どおり治療担当者から教育者に転じたのである。自分の念願どおりの道を進める私は、本当に幸せだと感謝している。

私は医師として臨床を42年続けていたが、常々感じていたことは、いつも病気になった人々を取扱うとゆう、いわば後手の医学ばかり実践していたことである。だから病気にならないような健全な心や体を備えた人間を育てる、つまり先手の医学を実践したいと思うわけで、今回教育者になったので、限られた人数ではあるが、学生たちを育てていきたいと思って実践している。

先述したように、音大の学生たちも同じように幼い。しかし殆どの学生たちは汚染されておらず純情である。この点は地方色かもしれない。学生の98%は女性であるが彼女たちは古くからの常識、すなわち漢字、言葉、諺、様々なしきたり、エチケットを殆ど知らない。さらに、音楽療法の学習をするのだから、子守唄、童謡、小学唱歌、フォークソングなどを学ばなければならないのだが、赤ん坊から幼児の間の子守唄、童謡は殆ど知らない。これらのことは親が教え、歌って教え込む筈なのだが、今の親たちは、これらの作業を怠っているのである。特に子守唄、童謡を歌ってきかせる作業は、実は子供に親の愛情を注入する手立てでもある。

最近では親が心をこめて子供のために作ってあげる、“おふくろの味”も消え去った感があり、この2つの愛情注入の手立てを失って、親たちはどの様にして愛情を子供たちに注いでいるのだろうか。

私は学生たちと共に、現在高齢者施設で音楽療法を実践しているのだが、高齢者たちの癒しの音楽となっているものは、幼い時に刻み込まれた、子守唄、童謡と小学唱歌であり、次いで彼等の青春時代の歌の数々である。子守唄、童謡は主に母に歌って聞かせてもらった思い出が強く、それ故に、自分たちの生母の愛情を回想する手立てでもある。従って、今の子供たちが高齢になって癒しの音楽が欠乏する可能性もあると危惧している。だから私は学生たちにこれらの歌の数々を、音楽療法士として、また、自分自身の心を潤すために教えている所である。

この事に加えて、学生たちは親から、人間関係を円滑にさせるためのエチケット、すなわち、挨拶、敬語、人を和ます言葉使い、そして他者を認知し、他者を尊敬、他者との相互扶助などの数々の仕付けをあまり受けていない。故に、大学生になっても人付き合いに大変苦労しているのである。そして、人との交流の方法を知らない故に、自己中心的な行動に終始せざるを得ないのである。

これらの大学生たちを見て、あきれられるのではなく、彼らは教えられていないのだから、大学生レベルと捉えずに、レベルダウンして、時には中学生、学童と同じように基本的なエチケット仕込みをしていかなければならないのである。

私も日々時に応じてこれらの仕込みを行っているが、素朴な彼らは素直に了解しているようである。本来ならば親達が仕込んでおくべきものと思うが、親達が怠った結果なのだから私たち教員が親代わりをしなければならないのである。この仕込みを本来の大学生レベルの教育とを同時に行わなければ、大学教育のよりよい成果は期待できないのが現状である。さて、私がカウンセリングをする学生の中には、親の過拘束にあえいでいたあり、強く反発して“おとな”不信に陥っているものも少なくないが、このような場合は殆どの場合、親のエゴを子に押し付けているのであり、子供をあたかも自分の所有物かペットと見なして、子供が別の人間であることを認識していない。人間として子供の人間性、人格を無視しているとゆう事になる。そして自分の思う様にならない子供を反抗児と見なして、自分の感情をあからさまに子供にぶつけ、子供たちを傷つけているのである。これらの親たち自身が幼いとゆう証でもある。これらの傷を受け続ける子供たちを、私は傷を癒す事と共に、親を超えるように育ててゆくのである。昔の諺に、「親はなくとも子は育つ」とゆう言葉があるが、現代では私たち教育者によるみこの言葉が具体化するものと私は考えている。

「子供たちの範例が不足している」

冒頭に述べたように、大人たちが現実に行っている言動は、殆ど全てが「裏腹の行動」で矛盾ばかりである。若者たちにとっては、いったい何が真理なのか、戸惑うばかりである。従って見習うべき人間も甚だ少なく、若者達の大人不信は強まるばかりである。わが国の現実でも、会社の駒となって働かせられ、自分を見失っている父親、物質至上主義に汚染されている親たち、人間の価値は学歴、地位、権力を持つ事に専心？している親たち、などなど。これらの事例は好ましい範例ではない。自分が信仰しようにも、宗派同志で戦争ばかりしている宗派、あるいは、いかがわしい宗教を見ていたのでは、不信感を抱きこそすれ、決して信仰には入らないであろう。見習うべき範例に乏しい今の若者たち、本当に不幸だと思う。

「親の後姿を見て育つ」とゆう諺もあるが、上述したような親たちの後姿では、育つのではなく汚染されたまま身体だけ大人の型になる。とゆう結果を招いてしまうのではないか。

「どの様にして若者たちを育ててゆくか」

私は20年前から、日本人の未熟化が年々進行している現実を見聞きして、21世紀は次の日本を担う人材不足になるのではないかと危惧していたが、未熟化はますます進み、少年犯罪、非行、ひいては殺人までが増加するに至ってしまった。そして子育てを嫌う“おとな子ども”の増加の結果、わが国の少子化もどんどん進行している事も、将来の日本の人材不足に関連し

ている。

この危機に、最優先に私たちが考え、実行しなければならない事柄は、子育てである。

具体的には、第1に親の姿すなわち私たちの姿をよりよい範例とする事が必要である。すなわち、人間の宿命に即した生き方に戻す。つまり世界皆唯一人、前進しかない人生、後戻り、静止はできない。終点は墓場。必ず死ぬ。などから生涯学徒の姿勢を固着させること、学ぶ姿勢は常に謙虚であり、同時に正直で素直な心でないと物事を正確に学べない。人間にまつわるあらゆる事を学び続ける。出会った人たちもそれぞれ学びの糧である。だから日々学ぶことばかり。学ぶ軌道が固定されれば、楽しいし飽きず、絶えず意欲的である。この姿勢が出来ると突っ張りや防衛をする必要がなくなり、余分な力が入らない自然体になることが出来よう。子供に向学心を植え付けるのには、自らが示さなければならないのである。教員こそこの姿勢の確立が不可欠であり、教える内容に説得力も増すのである。また、この姿勢は、心身の健康保持の基本となるので、学生たちに是非示してほしい。

第2に、正直で素直とゆう事の具体的な教育は、自分の正直な気持ち、感情を言語で表現する。自分が誤ったことをしたときには、直ちに認め謝罪し、改める言動である。この言動を私たち自らが若者たちに示してゆくことが大切で、この行為によって若者たちは納得するのである。

第3に、宿命の中に“世界皆唯一人”とゆう言葉があったが、人間それぞれ独特の個性や能力を持っているはずである。日本人は応々にして一生かかっても“己れ”のオリジナリティに気付かない人が多いのが伝統のように思うが、先ず私たち自らが“己れ”を振り返り、確認をしなければならない。もし不明であったら、今から他者の人間像を改めて学び直して、対比して“己れ”を知る努力をしなければならない。私たちのこの行動が、若者たちに己れを知ることへの意欲、必要性を教える結果になるのである。

第4に、現代の便利さの弊害を説くことである。コピー機は、文字、文章を書き写すとゆう書字の学習を怠らせる。ワープロは漢字の学習を鈍らせる。また、交通機関の発達は歩くことの機会を激減させる。若いころから健脚を作れば生涯楽しく生活が出来る。だから歩き癖をつけることは大変重要なのである。この他にもいろいろあると思うが、便利さは人間の心身の忍耐力を養う点でも弊害となる。これらの事柄について十分に教えて納得させる努力が必要である。

おわりに

心身がたくましく生きる力の強い若者を育てる事に、私たちは全力投球をしなければ21世紀の日本は危機に陥ることを私はあえて強調したいのだが、先ずは私たち大人が自らを律して、若者たちに成長モデルの範例として示してゆく事が必要なのである。

篠田知璋 略歴

- 1934年 東京生まれ
 1940年～ 幼稚園から大学2年まで成城学園で学ぶ
 1958年 東邦大学医学部卒業
 4月～ 聖路加国際病院インターン
 1959年 同院内科レジデント、以下内科助手、医幹、副医長、
 1984年 立教大学一般教育学部保健体育科教授 同大学診療所長を兼務
 1998年 立教大学コミュニティ福祉学部教授 同大学診療所長を兼務
 1999年4月 くらしき作陽大学音楽学部教育音楽科教授現在にいたる

学会活動

医学博士

全日本音楽療法連盟常任理事

日本音楽療法学会常任理事

日本心療内科学会理事

ライフプランニングセンター理事

日本POS医療学会理事

死の臨床研究会世話人

日本心身医学会代議員（認定医 指導医）

全国大学保健管理協会評議員



主な著書

- 「読むだけでやせる本」(主婦と生活社)
 「患者から学ぶ看護学」(中央法規出版)
 「新しい治療法としての行動医学」共監訳(医学書院)
 「ふれあいの看護」(医学書院)
 「ダイエット中毒への警鐘」(中央法規出版)
 「心と身体のセルフケア」(中央法規出版)
 「医療の人間学」編著(講談社)
 「いま増えている新しい病気」共著(法研)
 「壊れかけの子供たち」(東洋出版)
 「自律神経失調症」(法研)
 標準「音楽療法入門」(上・下巻)(春秋社)
 「高齢者のための音楽療法」(中央法規出版)など
 「新しい音楽療法」(音楽の友社)